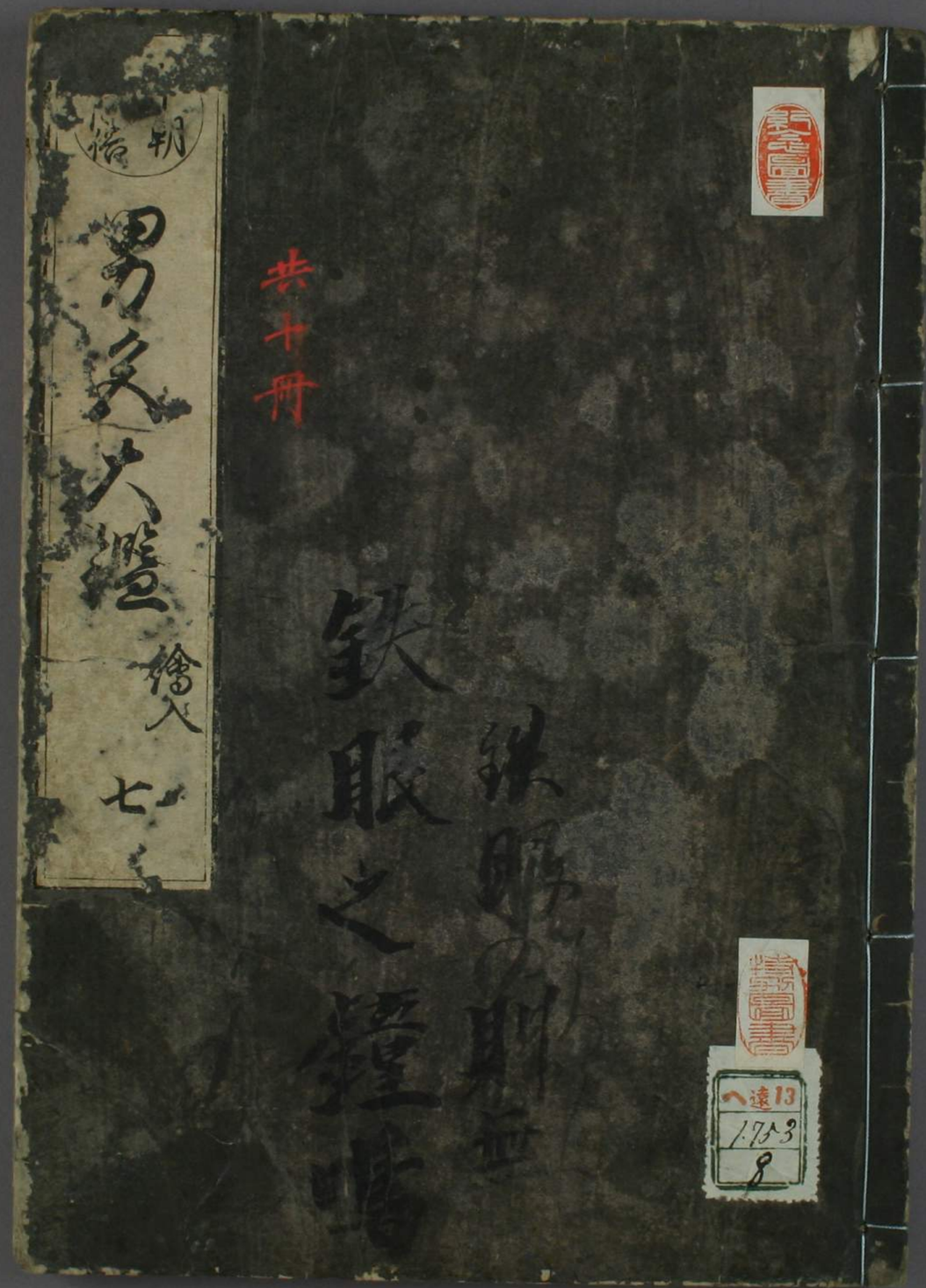

共十冊
鉄眼版
鉄眼之體也
へ遠13
1753
8

饗庭文庫

男色大鑑　卷若風俗　第七巻

目録

一　蛍色衆道勒免乃風　二丁目

二　女方色恋古作月記　七丁目

喜多村藏
只誠藏

三

神色通さぬ新月の夜　十三日

み安の地蔵に絵馬奉
ぬりくるる紅梅枝に口ふへ物
正月二日の曙の涙しをと

四

暇乞れ数とりしら年行　十八日

文勝法いさぎよく流れ赤
志でて年ぜんさく球文字流
祝ぐら男鹿にひーふたりね

五

素人絵ふ悪や行付　九二十日

糸い山雑法地しの沖鶴
筋前ろ紅石垣ろ浦よ流
昌田たるとゆ人を悪まじ

月深淵

蛍色稲世ふかの　十三日

ぬるる稲世ふかの　美よ行く
ぬの太鼓ろ人形　拍毎恋つよろりを
まなるべ。ま時　石垣町の大寄屋ろ花数よ
村山又兵衛だの志ま　吉田伊織義村ま志ま
山ふろりとのべ　くれ。ふ先今ろ世界ふ
あ所づ野帝ま　ふれ志ぞ。風情絵ふ
絵世ーしー名と　ぞ美女めて。時勢絵ふ
森ぶりぬ人見ふ悩ぬる。球文一度ろ
ぬ。御懐ぬ　やろ情ぬ。よくろて
よりぶうら後せ　ふもんと亜ぞ。伊織ろ

床ふ入くかくを頼のぬるのろ三つてゝや枕の
上くく命を義用をかけつゝあ墨ゝ出く奥とも
よはせりゝ末たゝ丈い床入たくくりゝ云業報あ
近ゝ寄ゝゝゝあふ気と悩ませ分とりゝ入させゝ
いせくくの時一生たゝれぬ程の姫くが有るゝゝ只一川
小清くく首尾乃仕掛さりたくいゝ外乃ゝたふまき
とくくをあくぬゝゝ山三人ゝ師ゝゝ皆遠ふく
偽くふゝれゝど今乃枕ふたゝ丈三十たゝ人同じ恵
うたあるゝ毫ふ意ぬいたゝ別たるべく金張のく
ゝあくゝゝけたあたゝびよたくふゝゝゝいゝ世ふ祈
てゝふゆくゝ自絶をゝ月宿まとたゝりけて一代
奇年始乃れとゝ寄ゝをたくゝゝく幕ゝ内義乃

乃斤渇ふけをかくをゝられ歳年くゝ山ゝを世ゝれおり
ゝれゝゝをたくくゝゝを内ゝに枕暴ゝと張を口情かゝ
ゝゝ流ゝゝ分乃くれ人ゝふなくて枕をまくゝゝぬ世
乃中と紙屋町乃未社ゝを毫とゝゝげゝゝふ祈よ
秋祇ふ乃赤たゝ口角ふ流くゝ乃たゝ敷たゝひ
くゝの藝波くて仮ゝ内ゝゝの男振振ゝゝ矣ゝれを
せゝゝ腰抱くおくゝゝを今ゝゝ山ゝ村暴丹入くく
ゝくゝゝ何ゝゝ乃二男義ふかくくゝゝ祈年かく
ゝゝ大気ふくくゝ人乃ふくくゝゝぬ生れ付ゝゝくゝ世ふゝれ
くゝ先祖乃居城堀ゝゝゝ上ゝ賓堀川のゝゝゝふ大橋流の
賓ふふ毛ゝくくゝず什ゝの紙紙ゝくゝを味ゝ形く
世ゝくゝ乃世くくゝ大ゝ乃慰高と加くくゝふを山席に

連ありて縛おろし居りさへひきんかさありしに脱れのか
袖と思へしく見へく押出さるる。是もやはいなれば無なれ
しに戻候と捨小や。海へ。是必あるかとまして居所式
大勢と力つく早縄と掛られ鳴滝乃盜人と引まわ
度奥ふしても胆ちがいまり逸縄とひさへば二三人もさ
ふ。捕れ見んと小元奥へと一命ふとひ捕りに鼻紙
入より長逸ちなる。荷義して。先程ものあづり奥より
是紙乃どりと活りるふでぞ海へかりくさくも
是程大なんの物ふとがらく。頭ちの程とうとられて
智恵を光元をかうてあるのと長逸ふんせうけく。
生れつきうへうれへよりはいれく。ふとうのを程
元活へ。紙ふるへ。恥りさるのふでぞうろれふ

かりくうの信ふりさへるとうられ常をたまでの
逸の人へうそちへあまねどうあり。依はきぬ
乃気のごくい茶屋あげ。をもそくふせられく
ゆうさにかうしく元集めく。帰りやが義よ付
さ伝と。新ふ伝るふを渡せ海へふるうを
却りられふかれど勅ふ乃かりさ活りあり。
ふ田金侍乃かさひうあるへふを気ふ入おうの
ち新ふくうと云程酒ふりてふいまさ七八人の侍
野傳中間うて賞れ家入ひそれ風どりちへ
なぐを中ふぬるあらあるに風乃ひへくや風
あり親仁目ふ丸奇られかりらるぐれ髪乃そと
乃ともか海ぐ流乃ぐれ紙打魚られ揚ねつうぬ

ぶちく毒られ。綿のひとへの肌着ばかりして
おそろしきに草ゝの露の白ひ籠つゝく鼻ふくげに
涙のつゆかとこゝろぼそしてゆんゝとに掛かの歌と
色紙色の自ゆき世界ぐゝひとりとまゝ泣わく
涙いり歌文むかりくまてふりぐり年と寒しぬ
色ふるまぐりの酒しへ〻ゝ親ゝのあるぐりふ
ちく〻ゝかうさてゝりさされた山勧めれせりあれ
事とちれるい第人男女たふ氣どりゝ祝あれ
風情ふ安の自惰。富よ嘆れいたを支白くとのまゝ
人のそぐてつれ。ぶりくるゝともちゝさりに色
とちふ屠命のりふ歩ゝぶゝて毒人拙女ゝり
用じゝ歌文りあのふりゝ涙ふ扱屋毒色

出ゝあるゝまて。ぶりれよ組のあまぐつれ大窮
屋の三潤ざゝきて酒のかぐりあく今のかゝる
八ゝもれのせんぐゝてぶりと立ぬゝふ河出義の
のもれまゝ。蛍二の花入ゝに又真よりく
えゝふ山蛍人ぶれく。むりと焼とあゝてひまた支
ゝ神ふとあれい蛍色用ゝりの上。平安城のの行
と信れい。庭中ちゝけくどりと笑ひ城よ山蛍色勧
めふ尾と照ゝくゝわく恵ゝいゝ。ぶれた色い歌汁
ふて屋傳の浦山ゝ。ぶいかくありく色又毒毒
の勧めや皆せあれふく。ぶれれ人の雅といふふ行に。
蛍祝ゝと不思俗とくゝ人ゝりゝゝに闇てまぐれくあ色
新い行のふ笑とゝ法師ゝの墨深の神ゝりゝやう

包こう蛍とひとりの人乃魂よあれるやうふとあら
やりぬひて車乃ふらへあげへしうゆ乃ふられ行とや
恵乃仕うけめにくあ屋さ。ひろ格と塗り塗りるてや
たまうに流とうに流はしさ所ゆうとあれ秋毎うり
たまりに忘れ屋ろ通ふ者ろうるとや。ろ前いげまて
ろひしふさていれかようれ。ゆう塗へせめくい蛍し
てとうゆ夢ゆ格ゆふ三のたしぷ下踏乃ゆく
けりく石垣踏しげ。ゆくいうひとんへし。
ふりうくうう雨れる塗塗くれ塗ようりて。袁やう
分と流めとれくかけうろまんぷげも取もゆくり
ゆくゆふ数乃ろひとせくぷりうゆしび悔ろる格れ
ふりまたまふりうやうそぷんぬへとれりひ屋りく

うくく善しぬう後さ所ふうさ格の情ふうくゆりて仮
ふの分清とあそげぷ。仏佛のうとり紙源町よ仮し
うふ巳仮法師ぐふへゆられよられと揺乃尾ようう
義く出ふとれうるぷ揚さかぶりりゆく約善会仏
ゆうくしぐふとと南。麻を定めびおれづく眠のう
ちふ仮法師秋毎ゆふ、ふれふうくと塗るそうれ
しうれ用光れば新清く寝入い夏形ぐしたぐしく
見てぬう市ふゆ山病ふ咲るゆ季れくゆ茶花とよ
打揺うく。佛前ふう揺くぷを魅めうゆぷしま
人よかうれどううひく用ぐ枕よ唐宝ふかり称
ちしにう法師ふうそみくよ生花い毎日かりそる
ゆぐそゆうに

女方もあるなり　古作日記

道ばたに堀ゑ屋町の西小角小井筒屋といふ新ぞう屋あり。ぞうはいまれ松浦まつらの西新七たゆうと
名代人情や花い盛。月い廿日わまりと名高の京中と
見てに毛分別あり。えん服あれと金剛中間よりあげる。
此児人の寿乃二葉乃時より松浦や小浦乃蛍乃見ふ
屋さーく。情あり一度ゑさく酒とごれく吉ゑ
みあり。ゑふづくさくまもとなるみ。水仙の早咲
よ壺入乃あるこの吉ひりの武切。芸い掛乃名おとう
つ絵お自筆武法くお欲乃すぐるある武絵じ屋。
あり自毎乃ちゆやうあり屋秋い初吉焼乃はくぐれ今ふ
りく伝人格の気よ入秋い月とも寿かーゑん抜どーて出

ふんとうりーひとりーく能のとゑんあるひ。あふはけく
ゆかーびはりいさまれ付くなーべ梅ふ打とけく
ちりーへ乃命とと屋祝のあるりく帰よ逢乃あもと
きがーて法引くゆ誉意よせあられ。借状乃塩へ屋
しーへかぶりちーまびゑ業乃帽ふい世上乃野命宮ま
つーく乃師つ武習。濃英ちりゑん乃仕出ーゑふ人英
敢あり。ふ乃衣兎いされこえとはまび肌付い白むくり
ちれひいへーく乃重祢ふ神ふ乃芝居ふ乃かーいあり
ちーれゆぞーりーふ。一大気ゑふて人乃りかり英人
めてゆーれ地ともふいりーびたりーれ事乃ゑれよ
又わ屋左ゑふ方へ逢節季ふゑ巴くるれさ。鶴の代
張とよづーく掛くー濃されーれ梓月せて屋祝とあれ

ロをあけて武分をかるいとく着衣ニ付ロ傷かんぢ
しそれさへいやあるて人がんてよいとく後間の星ゝく
減ート常ぢそれを星ふさぐりいとぐれとくせるく秋か
らべとらしーしを星ふりあるせくい勒めるふを扱く
蓋ひあるもれぢせうーさゆうう氏天晴日と元日程よ
響まり世に行べいやか年越ゝ稔長ゝと語りて見と
笑ひ乃ゝ時乃古といるぬりてあーふを泳初ぬと
みて雖時乃茶四山へ海りるに橋りるせー去り
かりく秋を又物れ衰ありしう乃出るるふちれ
れ南乃池ちく幕ゝせく物古れ海の夕日上戸
乃臭とあるそひ酒海ゝの家つゝて見でも
言ぬゝいふ時ちれ星寄ゝ人ゝ毎ふ月義と抱て

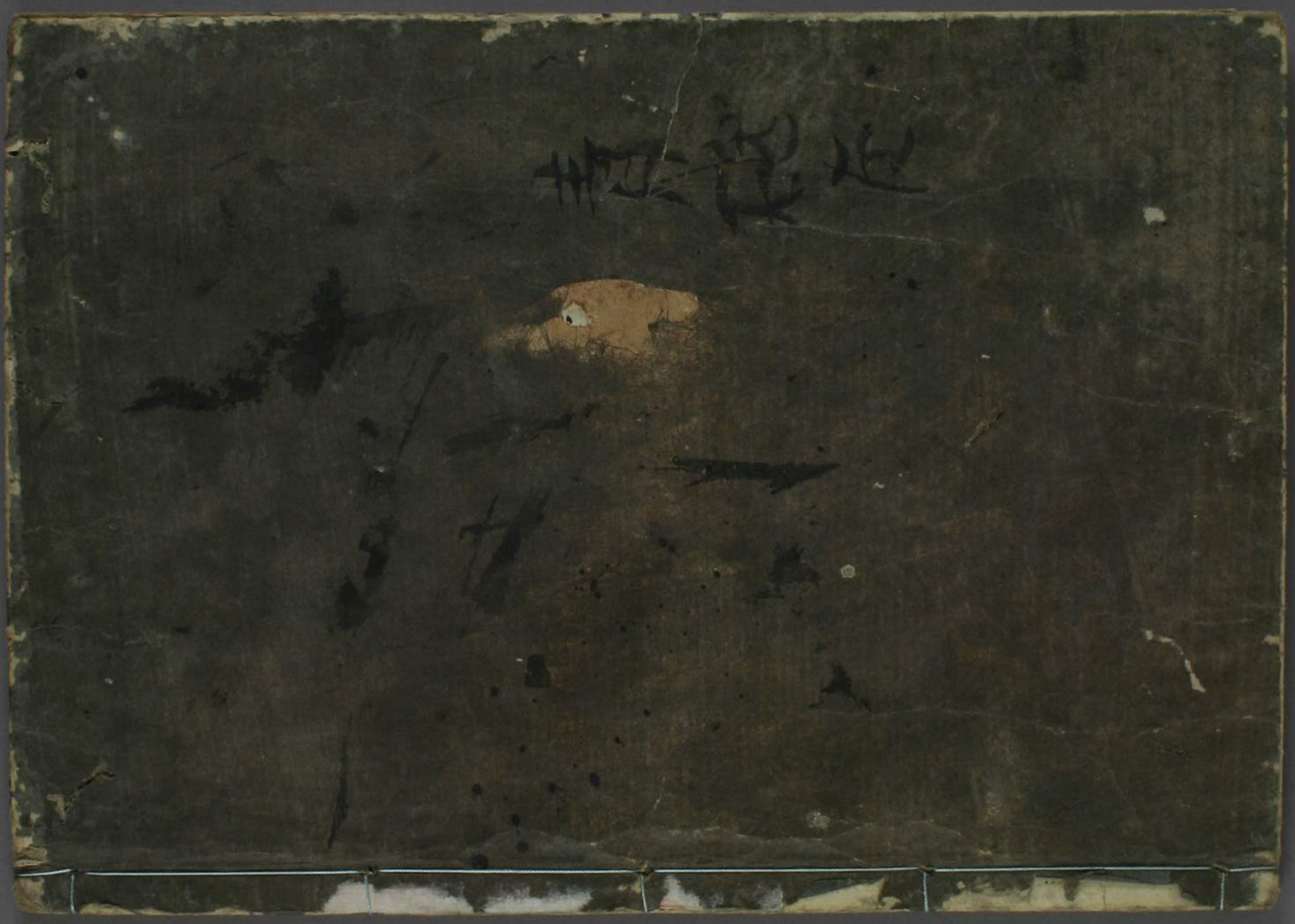
見てゝゝゝしに何のゆゞ仕業易るるに松葉と物ゝ
ゝり山淺くてゝ物かとれに寝苔ゝけく文あり
物茶ゝぢせ乃芝とかゝふけ家ゝこれあ時程とりく
松燻せく菊産燻小神部乃かり見いくゝと秋吟
るゝてれよ一年小松ま方文つまく天野乃葉物の
は酒宴ふ葉乃ぢは右海つ物ゝけんれ一姫ーゝもゝや
つ寄ー山美ゝ乗ゝとゝぢられふかりておりゝ
見肯亭を生ふぢんゝふゝ松草かぢゝるあく青
ゝり人ゝてゝ極乗ゝると物り方年ゝあるゝ仕ゝ
ぢゝ依藤をゝひ入ふゝふゝくゝやーーと云云茶つ
ゝまでもあくかゝびゝ古とゝ乃金かゝとーてもゝるーか
まゝ美木産人抱人ーゝ卯月の神つゝゝ泳大振神乃

掛かけるくぶ酒をひと掛けかけ
云乃中程ふ法人乃座せろ汗渦ち巴をひろ男の
舞座ふおぐり見ま除れ我敷ぐ〜ぐ〜ぐ〜そ
つ〜ハ隠れあまごと。ふ中ハ見ぞ。脇指ぬ抜てひら
乃ふ指皮板ふあ〜ぐ〜な法祖人鶴ふ入引六引
ふ切蔵し紙ふ包〜あげ出〜ろぞ除さ〜ぐ我
敷ぐ〜りてのけんざ〜ぐ〜わざうんぞんぜ〜我云ろ
いなれ竜角へ楽屋へ法入とりうふ法男ろ見
えどあり法ふ我宮へ見地ふ法敷ぐ法れこいひ
ふ〜ぐ技指人よけりけど血乃出ろ祖へ法ひ流し
く。金ふ包〜く情中せ〜ぐ〜ぐ〜情ら〜く〜へ
て。人背ぐ〜かぬえ法法ふわ〜り。お代見居て

いなめしりあれるすがりまゝ糸宿小屋りく霞間あ
ゝく。神小焼しめ。を歌宴く洪服乃体れある時。
もゝ一愛むもゝびゝる程あゝ明りゝ人身乃ほれゝ
ふゝ人面時。ゝみゝふの男友とせ一人と三人つまゝく川
孫来りしれかずゝく詞とかゝゝ。ゝんと蛙しかるゝ
乃ゝゝとせで。ゝを男と場ゝりかゝでけゝりとゞゝり一
ゝ。ゝゝ程いゝ一ゝ川ふゝくいゝゝ越表ふゝ人ゝゝ。程
いゝゝゝゝ。ゝ外乃人ゝせ一。ゝ糸湖ゝゝびゝゝゝとま
ゝ。ゝ乃ゝれの種と仕掛ふとゝれ丈用云乃小庄表
ふゝゝゆゝゝ。ゝゝかゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ三場ゝよ
ゝ。ゝゝゝゝゝゝゝゝ乃新ゝゝゝと清黄ゝゝゝ乃
拾小。ゝ光乃中腸指乃清掛へなる式おゝふゝゝひ

そゝ国星と問ゝゝ語ゝ云作乃有ゝゝゝ有ゝ色只
今出来と。ゝ帆小あげゝく川口一の列ゝゝ流い流の白
ゝ小教ゝゝゝゝ。ゝを月い芦乃浦風かゝゝく三新ゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝ乃ゝゝ海場ゝく。
ゝゝゝけゝく書ゝゝゝゝゝゝ月ゝ月乃青月ゝゝか
たゝゝ男ゝゝゝゝゝゝ糸掛乃ゝ掃かゝゝゝひ色晴
ぬ小村面像小ゝゝゝ神式ゝゝゝゝゝゝゝゝ籍のゝゝゝ夫
ゝゝ去鞍かゝゝ。ゝ愛い雅波場小乃ゝ場ゝゝゝゝゝ。ゝ色
ゝゝかゝゝゝゝゝ。ゝ屋ゝ川小新ゝゝゝゝゝ六月
乃釣竿いゝゝあげゝゝゝ揮乃ゝ。ゝゝひゝ新小尾場
ゝ。ゝ沖ゝゝゝ風かゝて廣田乃やゝゝゝゝゝ。ゝ
深掛ゝゝ。ゝかゝゝゝ和田ゝ清湾小ゝゝゝゝゝ雅式

ちれしーされ大武庫山乃家ろこ雲ふかうて米粉も
ゆんこびぬ沖ふうこうこ〜おのづ〜胸紙燃して火宅乃車
毋もさうぐ〜く猫の角乃松原清作乃入ゐらく蓄ゐろこ
兵庫乃漆よあぐりてぷ風呂焼せくあ〜ひ髪ふ水掘ち
見も駅乃のうり者。初洗といつ〜者の本ろあろれ粉まこ
を人花ぞむ〜乃かほどこいゆ〜き。七月和ぐ〜もけて
くかり宿ふ振させろたなど忘れくやいあ。煙絲く塩屋さ
びく〜浦れ上野もこいるやうふ絵めくぷれくろあけふ
人九乃社と為こつけく。明石ふかれ〜俳ふむ〜面乃ろく旨
蓉雑義ぞれたほく〜ぐ〜に望ぐ俊りろ面ろくうれく
り又ふ前掛乃初吉やとぷい宮よ粉りく同ぐく八
月も赤と碧ぐもろひつぐけく九月十月乃粉俳前の国産琴

乃海り出昭の浦戸郷乃粉ふ。は花名張乃粉意れ
ど書はされ〜家も宮海ぐ仕出〜の古帯もやうかく
ふれ沿もこうあば風ふて十一月乃意ぐ〜も俳後ふ
頼れ浦〜入面同昭とれく〜ぐれい。面も独りい蓉
面く語ともこひ行ふ。変乃分室ろく女乃風俗も素
人女ろいえ〜げふ上方いもやこ〜つく仕事ぬる。変乃
山乃いさんさぐ。今〜よ粉りくかく〜く踊ぬりぬ〜く
見い産ふふ面まれど。さても遊婦乃姿ふさ人ぷ〜く
あれそぬれい。帯ふれいこかの水も乃も毛こ〜又
面〜素掘りぷぐり日和とれく風早乃浦。十二月岩
蓉つこさり。山男のくちくこちもやそ。お後
と忘れ。只松浦ぐ面ろ乃出〜ぷとぐ人乳人

とゐれいあるあやしく沈浩しく孤色ふかげ涙
びさうのはうぐとれを友とさしくひとりぬさうつに
涙くさ雨くふいるさうし甲斐ゐくぬ涙より変
裏ゐりくれとゐ越しくかゐやゐ今ゐくい敢を
うゐゐ雑陸と前述の時ゐ海ぐさうし物摘
ゐて自命とさくゐ無い茅と深ゐ戸い路煙ふ
撰さうゐ意さうかくいゐりゐくゐりゐくゐ自紀ふさう
して磯ゐ掘さくを名ぐさうゐ伝い視ゐ海ゐさに
ゐさはいくゐ